姫君の見聞録

奈々里咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
姫君の見聞録

【Ｎコード】
Ｎ８２８６Ｖ

【作者名】
奈々里咲

【あらすじ】
彪榮はある日市街でチンピラに絡まれている少女を助け出す。助け出したその少女は金髪碧眼の異人で……。天然姫君と苦労性従者が織りなす、世界をまたにかけた（？）ファンタジーラブコメディ

登場人物紹介

紫（し）　彪榮（ひょうえい）：陽朱国の武官。２０才。１０才の時に両親をなくす。その後２年独りで生きてきて腕っぷしが強いため、１２才でそれが兵部の目に留まり、１４才の時に試験に合格。現在は武官の仕事をこなす一方で紅桓、藍華、緑華の面倒を見ている。棍術と体術に長けている。

リテンダ：アゼリア国の第五皇女。陽朱国との和平の証に陽朱国の第三皇子に嫁ぐ。政略結婚を嫌がっていたが、他国に興味があり正式な結婚まで２年の猶予とその間外交官の任につかせてもらうことを条件に承諾。１８才。２年後まで結婚のことは一部の高官以外には非公開。秋瑾の屋敷に居候する。

伯楽（はくらく）：彪榮と同じく武官。２５才。少しおちゃらけた性格。若くして兵部尚書。彪榮の上司だが兄弟子であり友人のような仲。

莫（ばく）　秋瑾（しゅうきん）：リテンダの上司。礼部尚書。５４才。

紅桓（こうかん）：１３才。孤児。

藍華（らんか）：緑華の姉。１０才。村が野盗に襲われ火を放たれる。奇跡的に助かり、彪榮に保護された。

緑華（りょっか）：藍華の妹。６才。

登場人物紹介（後書き）

登場人物紹介～
これは物語が進むにつれて随時更新していきます

1―1

＞i324469―41244＜
第1章
金髪碧眼の少女、陽朱国に来。

ここ陽朱国は連日晴天続きであった。その中でも今日は一番の快晴。
「おい嬢ちゃん。ぶつかっといて謝罪の一言もねぇとはどういうことだ？」
いかにもチンピラが使いそうな常套句である。昼間の、それも晴天下には似つかわしくない下卑た声が大勢の人でにぎわう市中に響いた。その声の主は見た目もチンピラそのものといった、がたいの良い男だ。
「なんですか」
その男が行く手を阻むようにして言い寄っているのは一人の少女。少女、と判断できるのは背格好と男が「嬢ちゃん」と呼んだこと、そして声からのみだった。何せその少女―と思われる人物―は頭から足元までをすっぽりと覆う外套を身につけていたのだ。
「ぶつかってきたのはそちらじゃないですか。私が謝るのは…えっと、“お門違い”です」
あぁ、やってしまった。
彼らを遠巻きに見守っていた誰もが思っただろう。彪榮（ひょうえい）もその中の一人だった。
逆効果だ。怒らせてしまったに違いない。
今日の仕事が終わり、なんとなく市中の出店が並ぶ通りをぶらついていた。もちろん、このようないざこざが怒るのは珍しくない。大抵は絡まれた相手が要求されるままに金を払うため大事にならないが、今回はどうやらそうもいかないらしい。しかも相手は女とき

た。
そこまで強い正義感があるわけではない。しかしここで見過ごしたのではどうにも後味が悪すぎる。
「あぁ？随分生意気な口きくじゃねぇか、嬢ちゃん。隠してないでそのツラ見せてみろよ」
そうこうしているうちに男が乱暴に少女の外套に手をかけた。
いけない。
相手が女とはいえ、いつ男が手を出してもおかしくない状況に焦った彪榮は足を踏み出そうとして、少女の頭を覆っていた外套が外れると同時に踏みとどまった。
「ほぅ…」
男が感嘆の声を上げた。彼らを見守る群衆も息を飲み、次いでどよめきが広がる。
外套の下から現れたのは、陽朱国では滅多に見ることのない金色の髪。
「珍しいな…。異国の者か」
男がしげしげと眺め、その髪に触れようとしたその手を少女は強く払いのけた。
周囲が今度は別の意味で息を飲んだ。
怒りの色が男の顔にハッキリと浮かぶ。
「なめたマネしてくれるじゃねぇか。女の…しかも異人の分際で…っ」
「…っ！」
男は綺麗に結わえられた少女の髪を無造作に鷲づかみにし、もう片方の手で懐からナイフを取り出し、脅すように少女の顔の前にちらつかせる。
「謝らねぇ、金も払わねぇってんなら、代わりにこの髪切り落として売りに出してやるよ！珍しい髪だ。かもじにして売りゃ高く売れるだろうよ！」
今度こそ彪榮はその足で地面を強く蹴り出すと、一気に二人のも

とまで間合いを詰める。ナイフを握った男の手をつかみ、何事かと視線をよこした男の顔をもう片方の手で殴りつける。
突然の衝撃に少女の髪からその手が離れ、うめき声をあげてよろける男。そのまま倒れなかったのは、がたいが良いだけあってそこそこに鍛えているからだろう。
「うぅっ…テメェ！なにしやがる！」
男はすぐさま反撃に転じナイフを彪榮に向かって突き出す。彪榮はそれを身を低くして避けると間髪入れずにその姿勢から足払いをかける。前重心になっていた男の巨体はいとも簡単に地に伏す形で倒れた。
「来い！」
男の手から解放されたものの、呆然と立ち尽くしたままの少女の手を取ると彪榮は群衆の中に突っ込んだ。

1―1（後書き）

友達に触発（？）されて妄想を形にすることにしました（笑）
勢いで書き始めたので設定もあまりしっかりしていません。
更新停滞が予想される上に、ちゃんと完結するかも謎な小説ですが、
宜しければどうぞ

1―2

騒動の場から幾分離れ、通りから1、2本横道に入ったところで二人は足を止めた。
「大丈夫か？」
多少息は上がっているものの、疲れの色などほとんど見えない彪榮が尋ねる。
対照的に少女は肩を大きく上下させて荒い呼吸を繰り返している。彪榮の問いに対する返答には少々時間を要した。
「えぇ…大丈夫です」
ようやく息を整え終えた少女が顔を上げ、そこで再び彪榮は息を飲むことになる。
見事な碧眼だった。
先ほど離れたところから目にした金髪にも驚いたが、曇りのない透き通った色のそれに、彪榮は束の間目を奪われた。
「助けていただき、ありがとうございました」
少女が礼を口にして頭を下げたところで、彪榮はふと我に返った。
「あぁ…」
そこから特に会話に発展することもなく二人の間に沈黙が流れる。
「それじゃあ、これで」と立ち去れば良いのだが、金髪碧眼の異人というのは多少なりとも興味をひかれるものであり、去るに去れず彪榮は沈黙をやぶって尋ねた。
「あんた、この国の人間じゃないよな。どこから来た？随分流暢にこの国の言葉を話せるようだが」
突然の質問に少女は戸惑い、しかしハッキリと答えた。
「私はアゼリア国から来ました。言葉は、もともとこのあたり一帯の国に興味があって勉強していましたので…」
アゼリア国。どこかで聞いた名だ。
あぁ、そういえば。と彪榮は上司の言葉を思い出した。

（確かそんな名の国との同盟が成り立って、国交が開けたとか言ってたな…）
「それで、あんなところで何してたんだ？」
彪榮は続けた。
「人と一緒だったのですがはぐれてしまって…。こちらには来たばかりで地理もわからないので、人に道を尋ねていたんです」
少女は懐から小さな紙を取り出し彪榮に見せる。その紙には陽朱国の文字で住所が書かれていた。
「この住所のお屋敷に住まわせてもらっています」と少女が補足した。
彪榮は紙と少女の顔を交互に見てから、小さくため息をついた。
根っからの善人というわけではない。しかし異国の地で一人心細そうにしている少女を見過ごせるほど悪人でもなかった。
そして彪榮は住所の場所まで送っていくという申し出を口にした。

1―3

少女を紙に書かれた住所に送り届けるまでの道中、彪榮は彼女について様々なことを知るに至った。

口下手ではないが共通の話題もない初対面の者と気軽に話すことができるタチではなかった。それでも異国に対する興味から必然的に少女に対する質問ばかりになってしまったのだ。少女は尋ねれば素直に答え、彪榮の質問も尽きなかったため、沈黙して困るようなことはなくて済んだ。

少女は名をリテンダ。歳は18。3日ほどまえにアゼリア国から外交官として陽朱国にやってきて、今日は世話になっている人に街を案内してもらっていたところ、はぐれてしまったらしい。

（随分若い外交官だな）

何か特別な事情があるのか。しかし初対面の相手にそこまで聞くのは気が引けた。

そうして当たり障りのない質問を続けているうちに目的地に着いた。

政府庁舎に近いこの区域は政府に勤める役人の住居が立ち並ぶところで立派な屋敷ばかりだが、その中でも目の前の屋敷は一際立派なものだった。

表札を確認して合点がいく。

莫（ばく）　秋謹（しゅうきん）

外交をつかさどる礼部の長官。礼部尚書の屋敷だ。しかも尚書の任について長いと聞く。

「どうもありがとうございました」

門を背にしてリテンダが彪榮に頭を下げた。

それでは、とリテンダは彪榮に背を向けて歩き出し、彪榮がその場を立ち去る間もなくすぐに足を止めて振り返った。

「あの、名前を教えていただけますか」

「名前…？」
そこで彪榮は自分のことは一切リテンダに話していないことに気付いた。
行きがかり上の偶然の出会いで、この先再び会うとも分からないとはいえ、相手の名前を聞いた以上は名乗るのが礼儀というものだ。
「彪榮…。紫（し）　彪榮（ひょうえい）だ」
「彪榮…」
リテンダはその名を呟くと「ありがとうございました」ともう一度頭を下げて礼を述べると、今度こそ振り返らずに屋敷へと小走りで向っていった。
その背を一瞥してから彪榮ばその場を後にした。

1―3（後書き）

ちょっとずつの亀更新ですが、どうぞよろしく。

1―4

その翌々日。仕事に政府庁舎に赴いた彪榮は自らが所属する兵部の官舎に向う途中で、少し先を歩く見知った男の姿を見つけて声をかけた。

「伯楽（はくらく）」

彪榮が声をかけるとその男…伯楽はおもむろに振り返り、彪榮の姿を認めると「よぉ」と返答をした。

「これから兵部へ向うのか？あんたにしちゃ早すぎる出勤じゃないか。明日は雪が降るかな」

伯楽に追いつき、肩を並べて歩き出すや否や彪榮は率直な感想を口にした。

「おいおい、なんだその言い草は。仮にも上司にむかって。それじゃ俺がまるで遅刻常習犯じゃないか」

「実際そうだろう。大体あんたはちっとも上司らしくない」

歯に衣着せぬ物言いに「参ったな」と伯楽は苦笑いを浮かべた。

「それで、何かあったのか？」

先ほどとは打って変わって真剣みを帯びた声音で彪榮は尋ねた。

するどいな。と伯楽は苦笑いのまま呟いた。

「見ればわかる。正装なんて上からお呼びがかかる時くらいにしか着ないだろ。それもこんな朝早くから」

伯楽は彪榮が属する兵部の尚書であった。だが些細な仕事は「俺はお前たちを信頼してるからな」と全て部下に丸投げし、社長出勤が常であった。その一番の被害者は彪榮だ。

それでも有事の際には見事な采配で兵部を統率するというカリスマ性を持ち合わせており、部下から慕われている。

そんな男が早朝からそれも正装で現れたのだから、何かあったと考えるのが妥当だ。伯楽が社長出勤しているうちは平穏な証拠でもあった。

「たいしたことじゃない。要人の護衛を頼まれただけだ」
「要人…？皇族か？」
「皇族…まぁそうとも言えるような言えないような…」
「なんだ、ハッキリしてくれ」
伯楽はしばらく考え込んでから口を開いた。
「アゼリア国と同盟が成り立ったことは言ったな」
「あぁ」
「その盟約の証に我らが陽朱国の第三皇子とアゼリア国第五皇女の婚約が決まった」
「そんな話初めて聞いたぞ」
同盟の成立は国中が知っている。それに伴う皇子の婚約ともなれば大事になってしかるべきだ。
「俺もつい今しがた知ったんだ。何やら複雑な事情があるらしくてな。この婚約はしばらく公にはしないそうだ。知っているのは各部署の尚書と…」
伯楽は彪榮に視線を向ける。
「俺、というわけか。いいのか？そんな機密を俺にしゃべって…」
「構わないさ」と伯楽は笑った。
「護衛役にお前を推薦しておいたからな」
「…は？」
「夕方に会うことになってるから、そのつもりでな」
伯楽は突然のことに唖然とする彪榮にいたずらっぽい笑みをくれると、さっさと自分の執務室に入って扉を閉めてしまう。ご丁寧に鍵をかけて。
「ちょっ、聞いてないぞ伯楽！！」
扉の外で叫ぶ彪榮の声には聞こえないフリをして伯楽は机の上の書類にむかった。

１―４（後書き）

登場人物が増えましたね。
彪榮の上司の伯楽です。
彪栄の５つ年上です。まだ若いけど兵部尚書です。
デスクワークが嫌でいかに上手くサボるかに日々頭を悩ませています（笑）
まぁ、基本的に部下に丸投げ／／／
しかし武術に関しては相当のてだれです。
いつか彪榮と伯楽の話も番外編とかで書いてみたいなぁ～

1―5

結局、その後も伯楽は彪榮の前に姿を現さず、人づてに場所と時間を教えられて、彪榮はしぶしぶその場所へ向かっていた。
（全く…。伯楽のやつ…）
伯楽が仕事を押し付けてくるのはいつものことで、もはや諦めの境地に達していたが、今回ばかりは断ることを本気で考える。
要人警護の経験がないわけではないが、他国との国交に関わる人物となれば話は別だ。荷が重い。
（丁重にお断りして、伯楽には他の者を推薦してもらおう）
断る決意が固まるのと目的地にたどり着くのはほぼ同時だった。
扉をノックする。
「兵部尚書、伯楽の命で参じました」
「入りたまえ」
中へ入ると白髪で口元に白ひげをたくわえたいかにも人の良さそうな老人が彪榮を出迎えた。今のところ部屋の中にはその老人しかいないようだった。
「礼部尚書、莫　秋謹殿ですね」
「いかにも」
「お初にお目にかかります。兵部の紫　彪榮と申します」
彪榮は両手を合わせ頭を垂れる。
「伯楽尚書からうかがっています。相当腕がたつとか。今回のことはご存知ですね？」
「はい。実はそのことで折り入ってお話が・・・」
「ございます」と続けようとした彪榮の言葉は、つい今しがた彼が入ってきた扉から聞こえてきた第三者の声によって妨げられた。
「秋謹さま」
女の声だった。たt
「申し訳ありません。迷ってしまって…」と秋謹のもとに駆け寄る

その人物に彪榮はぎょっとした。
相手もまた美しい青の瞳を丸くして彪榮を見つめた。
「ご紹介いたします」
忘れもしない。たった2日前の出来事だ。
「こちら、アゼリア国第三皇女」
金髪碧眼の少女。
「リテンダ・フェンネル様です」
あまりの驚きに護衛の件を断ることなど、彪榮の頭の中からスッカリ消えていた。

「縁は異なもの」というのはまさにこういうことを言うのだろう。
この時ほど身にしみて感じたことはない、と彪榮は思った。
「なるほど、先日リテンダ様を我が屋敷まで送ってくださったのはあなたでしたか」
3人は秋謹の執務室から続き扉の応接室に場所を変え、茶を飲みながら先日のあらましを話していた。
「あの日は市中をご案内しようと屋敷のものを供につけたのですが、思いのほか人通りが激しかったみたいでしてね。助けてくださったのがあなたで良かった」
湯飲みを置くと秋謹は微笑んだ。
「この件を引き受けてくださるのがあなたなら、私もリテンダ様も心強い」
「秋謹殿、そのことについてなのですが」
彪榮は先ほどから胸のうちに抱いていた疑問を口にした。
「今回の件は皇女の護衛とうかがっています。ですがそれと礼部と何の関係が？他国の皇女が外交官と偽っているのは何故ですか？」
礼部尚書のもとに赴くよう伝えられた時も不思議に思ったものだ。
そして目の前の皇女様とやらは、先日確かに自分のことを外交官と言っていた。
一体何がどうなっているのか。

「なるほど、伯楽尚書もそこまでは説明なさらなかったのようですな。よろしい、私からご説明しましょう。…構いませんか？」
秋謹は隣に座るリテンダにうかがい、了承を得ると話し出した。
「外交官、というのはあながち偽りではありません。婚姻の公な発表がなされないことはお聞きですか？」
「はい」
「正式な婚姻発表は2年後です。リテンダ様には慣れぬ異国の地。婚姻は知識見聞を広め、この国を良く知ってからでも遅くはないだろうという皇帝陛下のご配慮にございます。それまでは一部の者以外には皇女ということは伏せて、外交官としてこの礼部でリテンダ様をお預かりすることになったのです」
「護衛、というのは？」
「リテンダ様は兼ねてよりこの国や他の国々に興味がおありとのこと。そこでご本人の希望もあって、我々が他国に赴く際にはご同行なさることになりました。彪榮殿にはその道中の護衛をお頼みしたいのです。表向きは外交官ですのであまり仰々しい護衛はできず、しかしリテンダ様の容姿はこの地域では珍しいため、先日のようにいかなる者が危害を加えようとするか分かりません。そこで、一人腕の立つ武人をリテンダ様付きの護衛にと伯楽尚書に申し出た次第です」
（なるほどな）
皇族の護衛かと聞かれて、伯楽が曖昧な返答をした訳がこれでハッキリした。表向きは他国に赴く外交官の護衛。しかしその実は皇女というわけだ。
「引き受けていただけますか？」
秋謹にそう尋ねられて、彪榮は自分が今回の任務を断りに来たことを思い出した。それをスッカリ忘れて各部の尚書しか知らないような詳細な事情を聞き、気付けばなし崩しに引き受けるしかない流れを作ってしまっていた。
その時、応接室の扉が叩かれた。

「秋謹殿、急ぎ連絡したいことが」
どうやら秋謹の部下のようだった。「しばし失礼致します」と秋謹は席をはずすと扉の向こうに消える。
はぁ、と彪榮はため息をもらした。
（どうしたものか・・・）
彪榮は眉間に手をあてて難しい顔をして考え出した。リテンダがそんな彪榮をじっと見ていることにも気付かずに。

１―５（後書き）

伯楽って調べたら「馬の素質の良否をみわける人」って意味があるらしいです。
そう言われてみれば高校の漢文に出てきた気がする・・・
でもこの小説の伯楽は違いますよ（笑）
「人物を見抜き、その能力を引き出し育てるのが上手な人」って点では一理あるかもしれませんが・・・

1―6

結局、秋謹が戻ってきたときに話を切り出すしかないという結論に至る。だがしばらくして扉を開けて入ってきたのは秋謹ではなく彼の部下だった。

「申し訳ありません。莫尚書は急ぎの用件で出なければならなくなりました。尚書より彪榮殿へ『この件については後日改めて』と言付けを預かっています」

彪榮の脱力感は半端なかった。

（断ろうと思っていたのに。先延ばしになったな…）

「分かりました。では今日はこれで失礼させていただきます」

仕方がないと割り切って彪榮は席を立つと、リテンダに向って両手を合わせて頭を垂れる。すると、リテンダもあわてて席を立って彪榮に向って同じようにした。

そして彪榮は応接室を後にしたのだった。

皇女との面会の後はそのまま帰って良いとの伯楽の言葉をこれまた人づてに聞かされているため、彪榮のその足は市街へと向っていた。

（意外だったな…）

あの皇女様はこの国の礼節についてもある程度分かっているようだ。どうやらこのあたり一体の国について勉強していたというのは本当らしい。

この国に関する知識や言語もそうだが、望んでもいない政略結婚をさせられるうえに、見たところ母国からの従者もなく異国の地に一人という状況にもかかわらず、その立ち振る舞いは堂々としたものだ。

まだ幼さが残るように見えても皇族というのは伊達じゃないな、と彪榮は感心した。

そうしてリテンダのことを考えていたからだろうか。雑踏の中から聞こえてきた声に彪榮は足を止めて振り返った。
「あ、あのっ…」
そこには人ごみを掻き分けてこちらに向ってくるリテンダがいた。
「リテンダ皇女!?」
彪榮が声を上げると、駆け寄ってきたリテンダが慌ててその口をふさいだ。
彪榮もそこでようやく「しまった」と気付く。リテンダが他国の皇女であることは口外禁止だ。
自分たちが周囲の注目を集めていることに気付くと、彪榮とリテンダは慌てて人目のないところへと移動した。
「すみません。思わず声を上げてしまって」
裏路地へ移動すると開口一番に彪榮は謝罪した。
「大丈夫です。周りの喧騒でハッキリとは聞こえていないはずです」
「気にしないでください」と彪榮を気遣うように微笑むリテンダに、彪榮は敬意の念を強くした。
「ところで、リテンダ皇女はなぜここに?」
彪榮が先ほどから尋ねようと思っていたことを口にする。
「それです!」
「は?」
尋ねた彪榮をリテンダは突然ビシリと指差した。
「その『皇女』というのは無しにしましょう。私の身分が周囲に知られてしまわないよう、今後は皇女と呼ばないでください」
突然の申し出ではあったが、なるほど、それは一理あるなと彪榮は納得する。
「分かりました。それではリテンダ様で良いですか」
そう尋ねると、リテンダはどうもしっくりこないといった様子で首をかしげて「うーん」とうなった。
気に入らないのだろうか。ではそれ以外に何と呼べば良いのだと彪榮が内心困り果てていると、リテンダはまたもや彪榮を指差して

言った。
「やはり、敬語も無しにしましょう！」
「はぁっ！？」
さすがにこの発言には度肝を抜かれて声を上げてしまう。そして彪榮が「なぜ」と問う前にリテンダは説明し始める。
「確かに私は守られる立場とはいえ、同じ政府庁に勤める役人としてはあなたと対等です。むしろあなたの方が先輩にあたります。それに年齢的にも年上のあなたが年下の私に敬語を使うのは不自然です。ですからどうぞリテンダとお呼びください」
「さぁ、どうぞ」と言わんばかりの目を向けられて彪榮はたじろいだ。
「ちょっと待ってください、リテンダ様。いくらなんでもそれは…」
「リテンダ」
うっ…と彪榮は言葉につまる。
有無を言わさぬリテンダの押しに、彪榮はしばらくの逡巡の後に諦めて肩を落とした。
「…わかりました。リテンダ」
「敬語」
「……わかった」
もはやすっかり覇気が感じられなかったが、彪榮のその言葉を聞くとリテンダは満足そうに微笑んだ。

１―６（後書き）

彪榮は一応２０歳って設定です。
で、伯楽が２５歳。

次かその次で登場人物が増えます。
やべ…名前全然考えてない…ｏｒｚ

1―7

「それで、リテンダ・・・は、なぜここに？」
呼び方うんぬんの話がひと段落して彪榮はぎこちなくも再び同じ質問をリテンダにした。
すると笑顔をわずかばかり曇らせるリテンダ。
「その・・・様子が変だったので・・・」
確かに皇女と礼部尚書との面会で多少なりとも緊張はしていたし、偶然の再会に驚きはしたが、変と言われるほどではなかった・・・気がする。
「変・・・？」
もちろん、体調は悪くない。
「浮かない顔をしていました。護衛の件のことで悩まれているのでは、と気になって・・・」
どうやら彪榮の苦悩は悟られていたらしい。それで、リテンダはわざわざ追いかけてきたのだと言う。
「何か不満があるのでしたらおっしゃって下さい。面倒なことを頼んでいることは重々承知です。ですから希望があればなるべくその意に沿うようにします」
彪榮は申し訳ない気持ちでいっぱいになった。
異国の皇族とはいえ、その護衛などこれとない誉である。だから、今回の仕事に対する不満はない。あるとすれば勝手に話を進めた伯楽に、だ。
「不満があるわけじゃない」
「じゃあ何故？」
「俺個人の問題だ」
大任であるがゆえ、その責を負う覚悟のない彪榮には荷が重い話だった。それに、理由はそれだけではない。
これ以上の追求は無しだと言わんばかりに言い切られて、リテン

ダは口をつぐむ。
　すると彪榮の背後から「あっ」と声が聞こえたかと思うと、小さな足音が2人に近づいてきた。
「兄貴！」
「紅桓（こうかん）」
　彪榮が振り返りリテンダが顔を上げると12、3歳の少年がこちらに駆けてくる。
「どうしたんだ、こんなところで」
「それはこっちのセリフ。俺は今から帰るところだよ。ところで・・・」
　紅桓と呼ばれた少年は彪榮の影からリテンダをいぶかしげに見て尋ねた。
「こいつ、誰？」
「えっと・・・それは」
　彪榮が返答をしぶると紅桓は「まぁいいや」と彪榮に向き直り、その手をつかんで歩き出した。
「それより早く来いよ。今日はすごいんだぜ」
　声をはずませながらぐいぐいと彪榮を引っ張る。
「ちょっと待て」
　彪榮はそれを制するとリテンダを振り返る。
「ここから1人で帰れるか？」
　そう尋ねられてリテンダは首を横に振った。政府庁舎か秋謹宅か。いずれにせよその周辺なら1人でもなんとかなったかもしれないが、市街まで出てきてしまうと難しい話だった。
「じゃあちょっと付き合ってくれないか。すぐ終わる。その後でちゃんと送るから」
　そして彪榮は「こっちだ」と目配せすると、再び手を引っ張り出した紅桓に従って歩き出し、リテンダは慌ててその後を追った。

１―７（後書き）

本当は今回は長く書く予定だったんですが、これから出かけなきゃいけない！でも更新したい！ということで短くなりました（汗）

次の更新は明日か明後日。
その時は今度こそ長く書きます☆

新キャラ「紅桓」出てきましたね！
紅桓と彪榮の話も本編中か番外編で書きたいなぁ～

1―8

１０分かかるか否かでたどり着いたのは市街地から外れた、陽朱国の国民層の中でも低い位置の者が多く住む区画の、ある長屋の一戸だった。

立てつけの悪い戸を開けて「帰ったぞ」とまず紅桓が、続いて彪榮とリテンダが入ると

「にぃ～」

という声と共に小さな子供が彪榮の足元に抱きついてくる。どうやら女の子のようだ。

愛らしい笑顔を彪榮に向け、彪榮が抱きかかえてやると嬉しそうに声をあげた。

「彪榮にぃ」

今度はさらに別の声が聞こえて、先ほどの少女よりも3つ、４つ上と見える少女も彪榮のもとにやってくる。その目鼻立ちから2人が姉妹であることは察しがついた。

彪榮が頭をなでてやると、その少女も嬉しそうに目を細める。

「ねぇ、にぃ」

彪榮の腕に抱かれた子どもがリテンダを指さしてくる。

「このおねぇちゃんは？」

きょとんとした目で見つめられてリテンダは何と答えてよいか分からず、助けを求めるように彪榮を見たが、彪榮も同じように思っていたらしく苦笑いを浮かべた。

「お友達？」

彪榮の影からリテンダを見ていた少女も尋ねる。

リテンダと彪榮が返答に困っていると、長屋の奥で先ほどからいそいそと何か作業をしていた紅桓が声をあげた。

「おい、何やってんだ。飯が冷めるだろ」

どうやら夕食の支度をしていたらしい。その声に姉妹が「はぁい」

と返事をし、彪榮が抱えていた方を下してやると2人とも紅桓のもとへとかけていく。
彪榮がその後についていくのに従って、リテンダも紅桓と少女たちのもとへ足を運んだ。
「お、今日は豪華だな」
3人の手元をのぞいて彪榮が言った。
3人がそれぞれ椀を手にして食べているのは野菜の煮物のようだった。少し大きめに切られた野菜がごろごろと入っている。それから小さな握り飯が3つ、皿に乗って置かれていた。
「倉庫の荷物整理を手伝ったら、店のおやじが報酬をはずんでくれたんだ。だからいつもより多めに買えた。ほら、あれ」
紅桓が食事をする手を止めて指差したそこには煮物が入った鍋と、その近くにまだ調理されていない野菜が転がっていた。
「これで3日はもつぜ」
得意気にする紅桓。彪榮はそんな紅桓の頭をわしゃわしゃと少し乱暴に撫でる。
「そうか。良くやったな」
「なんだよ、やめろよ。もうガキじゃないんだから」
紅桓鬱陶しそうに彪榮の手を払って食事を再開したが、その顔を見てリテンダはすぐに照れ隠しであることが分かり、なんだか微笑ましくなってクスリと小さく笑った。

3人が食事を終えるのを待ってから彪榮とリテンダは長屋を出た。
長屋にいた時間はそんなに長くなかったが、外に出るともう薄暗かった。
「悪かったな。付き合わせて」
「いいえ。私の方こそご迷惑じゃありませんでしたか」
「そんなことない。あいつら、客人が珍しいから緊張していたんだ」
彪榮の言葉に「そうですか」と返すと、しばらくの沈黙の後リテンダは「聞いてもいいですか」と控えめに声を発した。

「子どもたちの事か？」
彪榮がまさに聞きたいことを言い当て、リテンダがうなずく。
そして特に渋ることもなく彪榮は話し出した。
「あいつらはみんな訳ありで親がいなくて、俺が面倒みてるんだ」
「面倒を？」
「大したことをしているわけじゃない。あの長屋に住まわせて、時々食料を与えているだけだ」
リテンダは帰り際に彪榮が紅桓に米の入った袋を渡したのを思い出す。
「優しいんですね」
リテンダは率直な感想を言ったつもりだったが、以外にも彪榮は表情を曇らせる。
「優しい…ね。どうかな」
その笑みはどこか自嘲味を帯びている。
「あ…すみません…」
リテンダはとっさに謝罪の言葉を口にした。
「なんで謝る」
「気に障ることを言ったみたいで…」
あぁ、と彪榮は苦笑する。
「ちょっと思うところがあっただけだ。気にするな」
腑に落ちないままリテンダがそれ以上何も聞けずにいると「着いたぞ」という彪榮の声で、すぐ目の前が秋瑾宅であることに気づいた。
「この前に引き続きありがとうございました」
「いや、宿舎の方向だし大した労じゃない」
じゃあ、と足早に立ち去る彪榮の背をしばらく見つめてからリテンダは屋敷へと足を向けた。
リテンダと別れて宿舎へと向かっていた彪榮は、ふと立ち止まって空を見上げる。今宵の空は雲が厚いのか、どこかどんよりとしていて雨の予感を感じさせた。

そんな空に向かって息を吐くと、彪榮は視線を戻して再び歩き出した。

１－８（後書き）

あんまり長くならなかった（笑）

そうそう、秋瑾の「きん」の字が「瑾」だったり「謹」だったりしますが、正しくは「瑾」です。
帰省先のＰＣだと変換で「瑾」が出なかったもんで……

次の更新は明後日かな～
２９日から忙しくなるので更新は停滞すると思われます…ｏｒｚ

1―9

それから3日が過ぎた。
秋瑾から何の連絡もないまま、その日彪榮は仕事が休みで特にすることもなく、かといって政府庁舎にちかい宿舎にいてはいつ伯楽に見つかって仕事を押し付けられるとも分からなかったので、長屋の紅桓たちのもとに朝から来ていた。
だが彪榮が来たときには紅桓はおらず、姉妹の姉：藍華（らんか）が洗い物をする傍らで妹：緑華（りょっか）の相手をしていた。
そして昼過ぎに差し掛かった頃、戸が開いて紅桓が帰ってきた。
「兄貴！」
「よぉ、紅か…」
応えようとした彪榮は紅桓に続いて入ってきたリテンダに目を丸くした。
「こいつ、道に迷ってたんだ」
彪榮が尋ねるより早く、紅桓が簡潔に説明した。
「ま、迷ってません！」
その説明にリテンダが反論する。
「はぁ？同じ道を何度も行ったり来たりしてたくせに」
「そ、それは。色々なお店があるなぁと見てただけで…」
「それで7往復は多すぎだろ」
そこでリテンダはうっ、と言葉に詰まってしまう。どうやら一部始終を見られていたらしい。二の句が継げなくなったリテンダに紅桓はけらけらと笑った。
「笑わなくてもいいじゃない」と顔を赤くして怒るリテンダから逃げるようにして紅桓は長屋の奥へと逃げて行った。
彪榮がそんなやりとりをポカンと見ていると、リテンダが「すみません。またご迷惑を…」と謝る。
「いや、それは別に…。ところで本当は街で何をしてたんだ？まだ

道に自信がないんだろ？」
　つい３日前に秋瑾宅へ送った時も、まだ道を把握しきれていないことは見て取れた。そんなリテンダが一人で市街に外出とは無謀にもほどがある。
　するとリテンダは「えぇっと…」とどうにも歯切れが悪い様子で答えた。
「その…いつまでも人に送っていただくのは迷惑かと思って、道を覚えるために一人で…」
　かなりの小声で、最後の方は尻すぼみになってしまってすらいる。
　３秒ほどの間があって、彪榮はぶっと吹き出した。そして笑いをこらえようとしているのだろうが、否応にも肩がわなわなと震え口元がにやけてしまっている。
「そ、それで道に迷うとか…」
　本末転倒もいいところだ。
「地図とか持って出なかったのか？」
「いえ、地図はあります。…けど…」
「けど？」
　先ほどよりも長い間があった。
　少しは笑いも落ち着いた彪榮が興味津々で答えを待っていると、とんでもない言葉がリテンダの口から出てきた。
「じ…自分が、今地図上のどこにいるのかわからなくて…」
　再び吹き出した彪榮は今度こそはこらえきれずに腹をかかえて笑い出す。
「そっ、そんなに笑わなくてもいいじゃないですかぁ！！」
　恥ずかしさから顔を真っ赤にしてリテンダが言うも、彪榮の耳には届いていないようだった。
　これを機に、彪榮の中でのリテンダの印象は大きく変わることとなる。どうやらリテンダは自分が思っているほどしっかりしていないのだ、と。むしろどこかぬけていて、恐ろしく方向感覚がない。
　そして、このことはこれから後、幾度となく思い知らされること

になるのだった。

彪榮が宿舎に帰る際にまたリテンダを秋瑾宅へ送っていくということで、それまでは長屋で過ごすことになった。

最初こそ緊張していたものの、藍華と緑華はすぐにリテンダを歳の離れた姉のように慕い始めた。今はリテンダが2人の髪を結ってやっているようだ。ポニーテールやツインテールに三つ編みなど、それまでただ伸ばされただけだった髪が様々に結わえられるのが楽しいのか、次第に「あぁして」「こうして」などとリテンダに注文までし始めた。

紅桓は昼食を食べに一時的に戻ってきただけらしく、慌ただしくまた出て行ってしまったため、さすがにリテンダたちの輪に入り込めない彪榮は長屋の裏手の木の木陰に腰かけてウトウトとしていた。

どれくらい時間がたったのか。ジャリという土を踏む音にふと目を開け、彪榮は自分がそれまで寝てしまっていたことに気付いた。

「すみません。起こしてしまいましたか？」

やってきたのはリテンダだった。

「いや、むしろ起こしてくれて助かった。2人は？」

「寝ちゃいました」

「はしゃぎ疲れたんだな、きっと。…疲れてないか？」

「大丈夫です」

リテンダが彪榮の隣に腰を下ろし、木漏れ日の中、2人は押し黙ったまましばらく心地よい風に吹かれていた。

「あの、どうしてこんなことをしてるんですか…？」

頃合いを見計らったかのようにリテンダが尋ねると、彪榮はくすりと笑った。

「なんでも聞きたがるんだな」

「すみません。性分で…」

「いや、嫌なわけじゃない」

ただ何にでも興味を持つリテンダがおかしくて仕方ないといった

笑みだった。
話すことに抵抗を感じないわけではないが、ただ純真な興味から尋ねるリテンダには不思議と話してもいいと思えてしまう。また、身近な者に話すよりは、自分を深く知らない相手の方が幾分話しやすいというのもある。
いや、それ以前に本当は心のどこかで誰かに聞いてもらいたいと思っていたのかもしれない。
「愚痴っぽくなるかもしれないが…それでも聞くか？」
リテンダがうなずくのを合図に、彪榮は静かに話し出した。

１－９（後書き）

今日から忙しくなるうえに、この先が全然書けていないので更新は遅くなります～

藍華は１０歳、緑華は６歳という設定です。一応。

1―10

「あいつらと同じで、俺には両親がいないんだ」
それは彪榮が１０歳の時、両親は山道で野盗に襲われてあっけなく死んだ。それから2年、頼れる親戚もいない彪榮は街に出て死に物狂いで生きてきた。
出店の商品を盗みもしたし、収穫期の畑に夜忍び込んで野菜を持ち出したりもした。捕まって散々な目に合うことも少なくなかった。
いつ死んでもおかしくないという絶望を何度も味わった。それでもなんとか生きてこれたのは運が良かったとしかいいようがない。貧民街に身を寄せる同じような境遇の子どもたちが死んでいくのを、その2年のうちに数えきれないほど目にしてきた。
そんなある日、盗みを働いたところを運悪く兵部の一行に見つかった。
だが伊達に生き抜いてきたわけではない彪榮は、追いかけてくる役人の手を身軽にかわし、足をかけて転ばせたり、時には相手の急所をついて一時的に戦闘不能にしたりもした。
だが一歩引いたところで傍観を決め込んでいた男が動き出すと、彪榮はあっという間に地面に敷き伏せられていた。
『子ども相手に何をやっているんだ、情けない』
彪榮の頭上から呆れたような声がした。それまで彪榮を追いかけていた者たちが身を縮ませるのを見て、この男が彼らの上官であると察しがついた。
彪榮を敷き伏せたまま、男は『おい、小僧』と彪榮に顔を近づけてきた。無精ひげをたくわえた、猛者という言葉が似合いそうな顔だった。
『お前、いい動きするじゃねぇか』
盗みを働いたことを咎められるとばかり思っていたので、その言葉に一瞬戸惑いを覚えたが、敷き伏せられた屈辱もあって彪榮はキ

ッと男をにらんだ。
だが男は動じる様子は全くなく、にらんでくる彪榮の目をじっと見つめた。そして『気に入った！』とニヤリと笑うと、彪榮の拘束を解いて起き上がらせる。
『お前、うちへ来い。その体術はもっと上手く使え！俺が鍛えてやる』
今度こそ彪榮は呆気にとられて呆然とした。
それは彼の部下も同様で、正気ですか隊長、と止めるのも聞かず男は何がどうなっているのか分からないままの彪榮を強引に屋敷へ連れ帰ったのだった。
そして男は彪榮を屋敷に住まわせ、その男の指導の下、体術はもちろん棒術を含める様々な武器の扱いを教え込まれた彪榮は弱冠１４歳にして兵部の試験に合格し、今に至ったのだ。
男を師と仰いで同じように教えを受けていた伯楽とはそれ以来の仲だ。
ある時なぜ自分を引き取ったのかという疑問を彪榮が投げかけたことがある。すると男はいつもの調子で笑いながら答えた。
『ただの気まぐれだ』と。
「本当にいいかげんな奴だったんだ」
彪榮は懐かしそうに目を細める。
「とても良い方だったんですね」
リテンダがそう言うと、少し間があってから「あぁ」と彪榮は言葉を漏らした。
「子どもたちの面倒をみているのは、その方の影響ですか？」
だがリテンダの問いに、昔を懐かしんでいた彪榮の顔から笑顔が消えた。
「俺の様な境遇の子どもを助けたかった、と言えれば聞こえはいいかもしれないな」
「違うんですか？」
彪榮は苦笑する。いつか見たあの自嘲的な笑みだ。

「確かにあの人からの影響も少なからずあるだろうな。だが俺があいつらの世話をしてるのは、そんな高尚な理由じゃない」
１４で兵部へ入り、その腕の良さに彪榮より年上の者たちは一目置くと同時に、まだまだ幼い彪榮を可愛がった。一足先に試験に合格した伯楽もいて、仕事も訓練も大変だったが苦ではなかった。
彪榮は自分の実力を自負していた。
事が起こったのは彪榮が１６歳の時。
ここより西方の都市部で女子供が相次いで惨殺される事件が起きた。彪榮と伯楽を含む小隊が派遣され、隠密に見張ることになった。
一区画に2、3人という人員を置き、夜、人通りのなくなった居住区を空家の窓や建物の間に身を潜めて見張り始めて3日目。彪榮が物陰から通りを見張っていると、家を一軒一軒物色するように歩く不審な男が現れた。気付かれぬように後をつけると、男はある家の前で足を止めたかと思うと、躊躇なく戸を蹴り破って押し入っていった。駆け出した彪榮の耳に女の悲鳴が聞こえ、その家の中に入ると刃渡り２０センチほどの刃物を手にした男がそれを振り上げ、幼い子どもを抱えた女に切りかかろうとする寸前であった。
彪榮が男との間合いを詰め、長棒を男に向けて振り回すが、男は器用によけて手にした刃物でそれを受け止める。
互いに一歩も引かぬ状況で、彪榮は男の背後で力なく座り込んでいる女に声をかけた。
「逃げろ！」
だが腰が抜けて立てないのか、一向に動こうとしない。
「早く！」
そう叫んだ後、ガッと後頭部に強い痛みが走る。
太い木の棒で殴られたのだと気付いた時には、彪榮は床に膝をついていた。殴られた頭部から血が滴る。
共犯者がいたのか、と認識するよりも早く次の攻撃が彪榮を襲う。それを寸でのところで長棒で防ぐ。
「くっ…」

だが、相手もなかなかの腕力で、彪榮は防戦一方になる。
そして、背後で人の動く気配がしたと思うと、刃物を手にした方の男が再び女に切りかかろうとしているのが彪榮の目に入る。
彪榮は渾身の力で目の前の男を薙ぎ倒すと、身を翻した。
「やめろぉぉおおっ！」
闇の中で、窓からわずかに差し込む月明かりを反射して不気味に光る刃が容赦なく振り下ろされた。

１－１０（後書き）

彪榮の過去話になりましたね。
当時の詳しい話を番外編でやりたいなぁ～…
はたして実現するのだろうか（笑）

リテンダの過去話もいつか出てきますよ……多分←

1―11

その後のことはあまり覚えていない。伯楽たちが駆けつけてようやく我に返ると、戸口に一人が倒れ、目の前には歪んだ顔を血だらけにした男と、その男に馬乗りになって胸倉を掴み、同じく拳を血だらけにしている自分がいた。

そして、地に伏す女と幼い子どもの冷たくなった体があった。

それを前にして彪榮は己の不甲斐なさを呪った。

この事件以降、彪榮は誰の目から見ても明らかに憔悴していった。

夜、眠ろうとすると殺された女の最期の悲鳴が頭の中から聞こえてきて、その度に当時の惨状を思い出して彪榮は充分に眠ることが出来なかった。

そんな日が2週間近く続き、彪榮が無断で仕事を休むようになったある日、そんな彪榮を見かねた伯楽が宿舎へと押しかけてきた。部屋に入るなり、虚ろな目の彪榮の胸倉を掴むと容赦なく殴り倒した。

「馬鹿か、お前は！！そうしてお前が悲観に暮れていればあの女子供が浮かばれるとでも？何かが変わるとでも言うのか？」

伯楽は殴り倒されたまま起き上がろうとしない彪榮の胸倉を再び掴み、無理やり立ち上がらせる。

「悔しかったら強くなってみせろ。二度と同じようなことが起きないようにな」

そして少し乱暴に手をはなすと「あとはお前の好きにしろ」と残して伯楽は部屋を去った。

残された彪榮は事件以降初めて嗚咽を漏らして泣いた。

その翌々日から再び兵部に顔を出した彪榮をみて伯楽を含む皆が安堵した。

もともと訓練には熱心ではあったがこの日から彪榮はそれまで以上に体術や棍術を磨き、毎日倒れるまで訓練に明け暮れ、ついには

体がもたないと周囲に止められるまでに至った。
　しかしこれが功を奏してか、現在の兵部には彪榮の右に出るものは伯楽くらいしかいないまでに彪榮は力をつけた。その伯楽でさえも楽に勝てるわけではなく、ほぼ2人の実力は拮抗しており紙一重の差といえよう。
　だが彪榮がいくら力をつけても、助けられない命が過分にあったのも事実であった。
　その中でも一番大きかったのは、小さな集落が野盗の一団に襲われた事件だった。もともとその集団に目をつけていた兵部であったが、なかなか足取りが掴めず目撃情報のあった場所付近に張り込むことくらいしかできずにいた。
　その日、１０名弱の小隊で張り込みをしていた彪榮は夜にも関わらず、一部赤く染まる空に気付いた。張り込んでいた場所からわずかばかり離れたそこに駆けつけると、炎に包まれる村落があった。そして逃げ惑う人々とそれらの人を容赦なく殺す野盗たち。
　彪榮はすぐさま村民の保護と野盗の討伐に打って出たが、時すでに遅く、村民の大半は炎に包まれるか野盗の手によって殺されており、助けられたのはわずか数名にすぎなかった。
　燃え盛る炎を前に何もできない己に募る苛立ちを彪榮はどうしてよいかわからず、「くそっ」と地面に拳を埋めた。

１―１１（後書き）

久しぶり過ぎる…

いやぁ…

部活のオフが終わってまた活動が始まったり

９月も１２日までレポート提出があったりと

忙しかったものですから…

これからは最低限週１ペースくらいで

書けたらいいなぁ～

という願望を持って頑張ります

1―12

連絡を聞いて駆け付けた別の小隊も加わって消火作業が行われ、完全に鎮火したのは夜が明けてからだった。

野盗の多くは捕えるに至らなかったが、捕まえた野盗の中に幹部クラスの者がおり、そこから足がつかめてその一団を壊滅に追いやることが出来たのは幸いだった。

一通りの作業を終えて引き上げる兵部の皆々を尻目に、彪榮は一人残って焼けてなくなってしまった村を呆然と歩いていた。

自分の非力さ故に目の前で人を死なせてしまった。だから力をつけたのに、これではあの頃と対して変わっていないのではないか。もちろん今回の件はいくら自分一人の力があったところでどうにもならなかったことだということは分かっているが、やるせない気持ちを抱えずにはいられなかった。

自分に救える命など無いのではないか。そう思ってしまう。

そうして何の答えも出ないままその場を後にしようとした時だった。微かなうめき声が聞こえた気がした。本当に小さな声だったが空耳で済ませることはできず、彪榮は周囲の茂みを手当たり次第に見て歩く。

さして時間をかけることなく、彪榮は茂みの間から2人の少女を見つけ出した。姉妹のようで、姉が妹を抱き込むようにして倒れており、どちらもひどい火傷を負っていた。一見死んでいるように見えたが、彪榮が近づいて確かめると僅かながら息をしている。

彪榮は上着を脱いで二人を包むようにして抱きかかえると兵部へと急いだ。

先に引き上げていた小隊と伯楽は後から血相を変えてやってきた彪榮と彼が抱える子供に何事かとどよめいたが、それを一切気にすることなく彪榮は兵部付きの医者のもとへと走った。

２人の火傷の治療は滞りなく進んだ。姉の方は治療後すぐに容体が安定して静かに眠っていたが、妹の方は荒い呼吸を繰り返すばかりだった。子どもにとってはほとんど致命傷ともいえる火傷を負っていたらしく、医者には今晩が峠だと言われた。

彪榮は医務室に居座り寝ずに２人の看病をした。兵部の仲間が何度も看病を変わるという申し出をしてきたが全て断った。

少女はうなされ、何かを探すように小さな手が宙をさまよう。彪榮は祈るようにして固く握ってやった。

そうして空が白み始めた頃、ウトウトとしていた彪榮だったが己が包み込んでいた手がピクリと動いたことにハッとして目を見開いた。

すると、気づけばすでにうなされなくなり安らかに眠る少女の顔が目に入り、そしてゆっくりとその瞼が持ち上げられた。自分の置かれた状況が把握しきれないのか、きょとんとしていたが彪榮越しに見える寝台で眠る姉を見つけて安心したようだった。

彪榮はその小さな手を再度固く握りしめて「良かった」と小さく呟き、目元を濡らした。

１―１２（後書き）

久しぶりの更新～
彪榮の過去話も次で終了かな？

あと１―１にイラストを載せたのでよかったら確認してください。
一応リテンダのイメージこんな感じです。

1―13

背中に火傷の跡が残ってしまう以外は、姉妹の体調は順調に回復した。

伯楽の配慮もあり、彪榮は兵部の仕事を休んでしばらくの間2人の世話をすることを許された。最初は彪榮のことを不審がる態度を見せたが、世話をするうちにそれもなくなり、毎朝病室に顔を出すたびに笑顔を見せるようになった。

姉は藍華、妹は緑華といい、妹に先んじて動き回れるようになった藍華は緑華の面倒をよくみる良い姉であった。緑華は人懐こいが寂しがり屋で、常に藍華か彪榮に傍についていてもらいたがり、懐いてからは夜病室から帰ろうとする彪榮に「帰らないで」と駄々をこねて困らせることもあった。

そうして2人が不自由なく動き回れるようになると、重大な問題が待っていた。

2人の今後についてである。

同じ村の者で助かった者たちは家を失い、生活が成り立つまでは政府の援助があるとはいえ子ども2人を養えるほどの余裕はなかった。陽朱国は孤児などの生活に苦しむ子どもへの対処は充実していなかった。そのため孤児院のような施設はなく、地道に養い親となってくれるものを探すしかなかった。

伯楽と兵部の者があーだこーだと話しながら頭を悩ませているのを見ていた彪榮だったが、自分の傍らで雰囲気を察した藍華と緑華が不安そうな顔で彪榮を見上げ、服の裾を掴んでくると、彪榮は意を決したかのように兼ねてから考えていた案を口にした。

「俺が面倒をみる」

その言葉に藍華と緑華は顔を綻ばせたが、ぎょっとしたのは伯楽以外の兵部の者たちだった。

ちゃんと面倒が見れるのか。

大変だからやめておけ。
反対意見はどれも似たり寄ったりだった。その中で伯楽だけが何も言わずに彪榮の顔から眼を離さず、その決意がいかほどのものであるか推し測っているようであった。
「できるのか」
伯楽のその一言でその場が一気に静まり返った。藍華と緑華も笑みを消して再び不安そうに彪榮の服の裾をぎゅっと掴む。
たった16，17の若造が子供の面倒を見ることがいかに大変か。まして政府庁勤めの彪榮が1日中2人の面倒を見てやることは不可能だ。
そうした諸々の条件を鑑みたうえでの質問だという事は伯楽の口調から察せられた。
だが、彪榮の決意も堅かった。
「やってみせる」
その決意を悟った伯楽は「時々変に強情だな」と笑みを漏らすと「言っておくが仕事を減らしたりはしないぞ」と釘を刺しただけで、それ以上は何も言わなかった。
その伯楽の表情を見て藍華と緑華も安堵すると同時に彪榮の足元に抱きついた。

そうして空家になっていた現在の長屋に2人を住まわせて面倒をみることにしたが、2人の面倒を見るのは予想した通り大変だった。何せ当時藍華は7つ、緑華は4つになったばかり。
すでにしっかりしていた藍華は緑華の面倒を良くみたが、毎日の食事や諸々の家事は彪榮がしなければならなかったし、しっかりしているとはいえまだ7つの藍華と緑華は夜が不安で、彪榮は兵部からの帰りに長屋に寄ってそのままそこで夜を明かしてまた朝兵部へ赴くという生活を繰り返し、ほとんど宿舎には帰らなかった。
それを嘲笑する者もいたが、彪榮は決して2人を見限ることはなかった。

伯楽は宣言通り仕事の量を減らしたりはしなかったが、いつ倒れてもおかしくない彪榮を見かねて助けてくれる者もいた。伯楽はそれを「甘い」と言ったが止めることはなかった。

緑華が段々と2人の手を離れてくると彪榮は藍華に少ずつ家事を教え、要領のいい藍華はそれをすぐに覚えていった。だがまだ夜何があるかの不安は消えなかった。

そして彪榮が2人の面倒を見だして1年と少しが過ぎた頃に長屋住まいに紅桓が増え、当時まだ11歳だったが腕っぷしはそこそこだったので、長屋の夜を紅桓に任せられるようになると、彪榮は今のように兵部の帰りや非番の日に顔を出すだけで済むようになった。

１―１３（後書き）

これで回想は終了ですかね。
次で一章が終わって二章に突入ですかね。
まぁド素人なんで、一章とか二章とかテキトーなんですが（^―^；）
この回想編を二章にしても良かったかな～…なんて（笑）
大分登場人物が増えた（？）ので登場人物紹介のページも作る予定です。

1―14

「護衛の件を渋っていると言っただろう？」
「え、あ…はい」
突然護衛の任の話を持ち出されてリテンダは一瞬呆けたが、すぐに察して尋ねた。
「子どもたちが心配だから、ですか？」
他国へ赴く外交官の護衛となると、長期の不在が当然となってくる。行先や交通の便によるが、片道だけで１０日とかかることなど珍しくないのだ。
だが彪榮は首を横に振った。
「いや、今となっては紅桓もいるし、あいつの稼ぎで3人食べて生活できている。俺がいなくても大丈夫だろう」
言い切るその口調は、確信に満ちている。
「では何故？」
リテンダが問うと、少し間があってから彪榮はゆっくりと口を開いた。
「2人が一命をとりとめて、俺を慕って、頼ってくれるのを見て思ったんだ」
この小さな2つの命は俺がいないと生きていけないんだ、と。
「俺はあいつらのためを思って面倒を見ているんじゃない。俺自身のためだ。俺にも守れる命があると、そう思いたかったから面倒をみているに過ぎない。ただの偽善だよ」
苦い経験となった2つの事件。己に助けられる命なんてないのだと絶望を味わいかけた。そんな時に偶然出会ったこの姉妹を、自分の自尊心を守るために利用しているのだ。
「あいつらが俺の手を離せないんじゃない。俺があいつらの手を離せないんだ」
「情けない話だろう？」と彪榮は自嘲する。

リテンダは何も答えない。だが困らせたかな、と彪榮が思っているとリテンダの口が「でも」とつむいだ。
「あの子たちが助かって、今こうして笑っていられるのは他でもないあなたのおかげです。私は純粋にそれを素敵なことだと思います。それに…」
良い言い方が思いつかないのだろうか、一つ一つ言葉を探すようにリテンダはその先をたどたどしく口にする。
「あなたは偽善だと言いましたが、あの子たちに向けるあなたの愛情は本物だと、私は思います。なんというか、その…親の愛情と言うか…。例え最初は利己心のためだったとしても、今あなたがあの子たちの面倒をみているのは自分のためとかそういう風には見えません」
リテンダの言葉を意表をつかれたようにして聞いていた彪榮だが、リテンダはどうやらそれを話が理解できていないと取ったのか、慌てて言葉を重ねる。
「えっと、ですから。親というのは子どもが無性に可愛くて、子どもが幾つになっても面倒をみたがるもので…。だから利己心がどうとかではなくて、もはや『家族』のような絆があるのだと私は思います。情けないとかみっともないとか全然思いません」
みっともないとは言ってないんだけどな、と心の中で突っ込めるほどにリテンダの必死さが、彪榮の心を軽くした。
こんなふうに人に言われたのは初めてだ。いや、そもそもこんな悩みを人に打ち明けること自体が初めてなのだが。
『情けないとかみっともないとか全然思いません』
他人の一言でこんなに救われるとは、そしてこれまでうじうじと悩んでいたのがバカらしくなるとは思わなかった。それこそ、目の前で今度こそ伝わっただろうかと不安げにしているリテンダを見て笑みがこぼれるほどに。
「じゃああれか、俺はいつまでも子離れできない親というわけか」
もちろん、リテンダが言いたいのはそういうことではないと分か

っていたが、心の余裕だろうか、少しからかってやりたくなったのだ。案の定リテンダは「違います！！」と慌てて再度言葉を重ねようとする。それを制するように彪榮が先に口を開いた。

「リテンダ」

ためらいもなくその名を呼んだのは初めてだった。リテンダも驚いて動きが止まっている。

そして

「ありがとう」

彪榮が柔らかく微笑むと、陽だまりのような温かな笑顔が返ってきた。

１－１４（後書き）

一応１章終了です。
２章はまだ構想が整ってないので少々お待ちを…

2―1

第二章　旅は道連れ
>i32470―4124<>i32471―4124<

その日、全ての仕事を終えた彪榮はいつも通り長屋の子どもたちのところへ向かおうとしていた。だが兵部の官舎を出る寸前で伯楽が後ろからいきなり肩に腕を回してきた。
「重い…」
ただでさえ仕事で疲れているというのに。
「彪榮、最近お前が若い女を囲ってるって専らの噂だぞ」
開口一番に何を言い出すのやら。にやにやと笑みを浮かべた伯楽を一瞥すると、彪栄は何も言わずにその腕をすり抜けてスタスタと歩き出す。
「おいおい、待て待て」
その後を伯楽が追いかけてきて、彪栄の横に並んで歩き出す。
「言っておくが、俺が流したんじゃないぞ。例の姫様だろ。秋瑾殿が話を持ってきたときに一度目にしたが、国交が開けたから港地区ならまだしも、このあたりじゃあの容姿は目立つからなぁ…。そういえば秋瑾殿からまだ連絡はないが、護衛の話引き受けたのか？」
伯楽の話には無視を決め込もうと思っていた彪榮だったが、さすがに最後の内容は無視できる話ではなかった。
「いや…」
「なんだ、断ったのか？」
その問いに彪栄は沈黙を貫く。
承諾はしていない。むしろ断るつもりだった。
だが、その決意が鈍った。
その沈黙を伯楽は彪栄が護衛の話を断ったと取ったのだろうか、彪榮の肩にポンと手を置く。

「せっかくの大任だが、まぁいいさ。だが、お前はもっと自信を持っていいと思うぞ。…難しいことだとは思うがな」
そして伯楽は身を翻すと、今来た道を戻っていった。

長屋への道すがら、彪榮は考える。
(伯楽にはお見通しか…)
なぜ護衛の話を引き受けないのか。
簡単だ。自信がないのだ。
己の力で人の命を守ることが出来るのか。
出来なかったとき、あの絶望を再び味わうのが怖い。
だがそんな理由を口にすることは憚られるため、子どもたちの存在を理由に逃げようとしている自分がいる。
子どもたちは彪栄がいなくても生きていけるだろう。
だが自分はまだ子どもたちの小さな命を守れているという現実に浸っていたいのだ。
けれど、自分の話を笑わずに聞いて情けない自分を肯定してくれた彼女を、どこか抜けているあのお姫様を放っておけないと思うのも、彪栄の決意を鈍らせている原因の一つだった。
そうこうしているうちに長屋に着き、その扉を開ける。
するといつもの様に真っ先に緑華が、それに続いて藍華が彪榮のもとに駆け寄る。それから、
「お疲れ様です」
と、リテンダが声をかけてくる。
あれ以来、リテンダはほぼ毎日のようにこの長屋に顔を出すようになった。
すっかりリテンダに懐いた藍華と緑華がまたリテンダと遊ぶことを望んだのだ。
表向きだけ外交官の彼女は、特に仕事を与えられることもなくただ日がな一日秋瑾宅で過ごすか街に繰り出すか—かなりの高確率で迷子になるが…—のいずれかという手持無沙汰な毎日を過ごしてい

た。そのため、姉のように自分を慕う藍華と緑華との交流をリテンダも快く受け入れ、一日の大半を長屋で過ごすようになったのだ。
極度の方向音痴の彼女が毎日長屋に来られているのは、仕事の始まる前かその合間に紅桓が迎えに行っているからだった。道を覚えたと言うので一度迎えに行かなかったら、案の定迷子になり、仕事中の紅桓が偶然リテンダを見つけて保護するに至った。最近になって「もう大丈夫です、完璧に道を覚えました」と言い出しているが、どうにも信用できないので、相変わらず紅桓が迎えに行っている。紅桓も「面倒くさい」と愚痴りながらも、リテンダを迎えに行くあたり、彼女のことを気に入っているのだと彪榮には察しがついた。
彪栄が長屋に着くとすでに夕食もその片づけも終わっていて、いつものことながら藍華と緑華がリテンダと戯れていたところだったようだ。紅桓は疲れていたのか、長屋の奥ですでに寝てしまっていた。
リテンダが来るまでは、彪栄が来る前に紅桓が寝ていることなどなかった。幼い姉妹を守る立場にあることを紅桓は自ずと分かっていたのか。それがこうして姉妹の面倒をリテンダに託しているところをみると、やはり彼女に気を許し信頼している証であろう。
「いつも悪いな」
足元にまとわりつく姉妹に寝る支度を促してから彪栄はリテンダに向き合った。
「いいえ、私も毎日楽しいので」
その笑顔と言葉に偽りはないようで、彪栄はリテンダの迷惑になっていないことに安堵する。
「…兄貴？」
小声で話していたが、物音や人の気配で目が覚めてしまったのか紅桓がむくりと起きだす。
「悪い、起こしたか」
「ううん、大丈夫」
「今日は遅かったからもう帰る。あとは頼むな」

「わかってる。兄貴こそ、そいつをよろしく」
そいつ、とは無論リテンダのことだ。迎えに行くのが紅桓の役目で、送り届けるのが彪榮の役目である。
「あぁ、それじゃまた明日な」
「また明日」
まだ少し寝ぼけ眼の紅桓の横で「バイバイ。彪榮にぃ、お姉ちゃん」と藍華と緑華が手を振って送り出してくれた。

2―1（後書き）

久しぶりの投稿…
学校が始まり、部活の大会があり…と忙しかったです。
で、また1ヶ月後に大会だから忙しくなる（汗）

2章突入～
構想が全然できてないけど（＾ｐ＾）

透明水彩にハマっていて
リテンダと彪榮を描いてみました。
「さぁ行きましょう！」
「いや、そっちは今来た道だぞ…」
みたいな（＾ｐ＾）

次は藍華と緑華を描きます！！

2―2

その数日後、いつものように長屋から彪栄に送り届けられたリテンダが屋敷に入ると、その屋敷の主である秋瑾が帰宅していた。
「秋瑾さま！！」
「あぁ、リテンダ様。ただいま戻りました。長く屋敷を空けていて申し訳ありませんでした。まだ慣れぬ土地だというのに…」
「いいえ、大丈夫です」
秋瑾は屋敷の者に茶の用意をさせるとリテンダと卓を囲む。すぐに運ばれてきたお茶に秋瑾は一度口をつけるとリテンダに尋ねた。
「屋敷の者から毎日のように市街に赴かれていると聞きましたが…」
「はい。あそこは色々な出店もあって面白いですし…。市街への道ももう覚えました」
得意げに答えるリテンダだが、その実は怪しいものだ。何せ今日も今日とて送迎付きなのだから。
「お一人で、ですか？」
「あ、いえ。それは」
「彪榮殿が？」
「はい」
知らぬ土地での一人歩きは危ういことはリテンダも重々承知。その上で市街に出るとなれば、異国の地で頼れるものが少ないリテンダの助けとなるのは秋瑾を除くと彪榮しかいない。
「とても良くしてくださいます。秋瑾さまがいなかった間、この国に慣れ親しむことが出来たのもあの方のおかげです」
この国での新たな出会いと楽しい日々を意図せずとはいえ与えてくれた。
リテンダの話とその表情から秋瑾は満足そうに微笑んだ。
「それはなにより。あの場で返事を聞くことはできませんでしたが、護衛の件は彼に頼んで正解のようですな」

その言葉にリテンダはハッとする。
忘れていたわけではないが、彪栄の話を聞いて以来その話題を出せずにいた。
彪榮が護衛の件で悩んでいるのはリテンダにも分かっていた。時折、ふと考えにふける彪栄を幾度となく見ている。長屋でも帰りの道中も。
リテンダが秋瑾にどう切り出すか悩んでいると、秋瑾が先に話を切り出した。
「今回はリテンダ様に他国行きの話を持ってまいりました」
「えっ？」
秋瑾の言葉にリテンダは驚きに声を上げる。
リテンダは、兼ねてから他国に赴くことを望んでいたのだ。
「我らが陽朱国が長年懇意にしている隣国、華櫻国の外交官が亡くなり、新しい外交官が就任しましたのでその挨拶に出向くことになりました」
もともと老年であった華櫻国の外交官が急逝し、秋瑾はその弔いに一足先に出向いたという。
「ご同行なされますか？」
「は、はい！！」
まさかこんなに早く機会に恵まれるとは思っていなかったリテンダは二つ返事で了承した。嬉しさで顔がほころぶ。
「わかりました。それではこの話を彪榮殿にもしなければなりませんな」
だが秋瑾のこの言葉に、リテンダは笑みを消して考え込む。
「…どうかしましたかな？」
不思議に思った秋瑾がリテンダの顔を窺う。
しばらくして、リテンダは顔を上げると秋瑾の顔をまっすぐ見据えると口を開いた。
「秋瑾さま。そのことでお話があります」

2―2（後書き）

学校と部活の方が忙しいので更新は停滞気味になります～
藍華と緑華の絵を描いたので次話を投稿した時に載せます。

最近、この話に登場するキャラたちの未来妄想に余念がありません
（＾ｐ＾）
私的にあの人とあの人をくっつけたいな～とか色々考えてます／／
／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8286v/

姫君の見聞録

2011年10月23日23時07分発行